

司馬さんのモンゴル

芝 山 豊

(以下は1999年の10月15日、大阪外国語大学において行ったモンゴル専攻の学部学生、院生、留学生に向けての講演を短く整理したものです。)

はじめに

最初に申し上げておきたいのは、いま司馬遼太郎という人について語るの少し難しい状況にあるということです。それは、「社会現象としての司馬遼太郎」とでもいうべきものに関する言説と、司馬遼太郎という作家やその作品に関する言説が錯綜しているということです。極端な「司馬かつぎ」とでもいうようなものがある一方、また一方には、「こきおろし」と呼んでもいいような批判があります。

1993年の文化勲章までにも、歴史観をめぐる論争めいたものはありましたが、文化勲章を受けてから、周囲の人々の司馬さんに対する見方が様変わりしてきたように思います。そして、司馬さんが亡くなってから、それまで以上に、自分の都合によって司馬さんを担ぎあげ、まつりあげて、自分の主張にあうように司馬さんの作品や発言を引用する人たちが増えています。そして、そういう人々やその主張に対する反発から、作家としての司馬さんやその作品を断罪するというような人たちがいます。

今日、私は、そうした社会現象としての司馬遼太郎をめぐる言説からは距離をおいてお話をしたいと思っています。といっても、価値中立や脱イ

デオロギーというのは所詮、幻想にすぎないわけです。文学研究というものは、非常に雑駁に言ってしまうと、文学的な感動のよって来たところを考えることにあるわけですから、司馬作品が好きか、嫌いかと尋ねられたら、好きだということになります。わざわざ嫌いな作品について研究するという人は少ないでしょうし、あまり幸せなことではないでしょうね。そして、司馬さんという人が好きか、嫌いかと尋ねられたら、やはり好きだと答えることになります。有名な人に会って、会わない方がよかったと思うことはまああるわけですが、お目にかかって親しくお話した経験はわずかですが、そのわずかの経験で、不快な思いをしたことはありません。司馬さんに会ったときに、不快な思いをしたから、彼は嫌いだという人も知っています。そういうことも確かにあるだろうと思います。ただ、私の場合そうではなかったということです。

司馬さんの作品が好きだし、司馬さんのことも好きです。でも、司馬さんを神様みたいな人だという気はない。そういう扱いをされることを司馬さんは好まなかった、というより嫌だったはずで、司馬作品の中には、我々がもう少し深く考えてみなくてはいけないことがある。いまからお話するモンゴルとの関わりもそのひとつです。もちろん、最後まで聞いていただければ分かると思いますが、司馬さんに対する敬愛の念というものが前提としてあるのだということを理解しておいていただきたいと思います。

アンビヴァレントな大阪への思い

もともと全集のために書かれた、まあ、自伝的な断片集のようなものが『司馬遼太郎の世界』に再録されていますのでそれを参考にします。

司馬さんは、大正十二年（1923）八月七日 大阪市浪速区に福田是定氏の次男として生まれました。お父さんは開業薬剤師。お兄さんは二歳で夭折しています。お兄さんがなくなって、本当なら次男なのですが、そして多分、気質的にも次男だった司馬さんは、長男であることを強いられたんですね。時代のコンテクストを考えると長男としての役割というのは人格形成に意味をもつことであつたでしょう。そのことと関係があつたかどうかはともかく、一時期、奈良で暮らされた後、ずっと大阪を離れることはなかったわけです。大阪に対して特別な愛着をもっておられたことはよく知られています。その司馬さんの大阪観を示す文章を引用してみましょう。

私は大阪でうまれて、いまもこの土地に住んでいます。あたりまえのことですが、長じてから、自然、いろんな土地を郷里とする人たちとつきあうようになりまして。それらの人たちとの接触の度合いが重なればかさなるほど、私は、自分のうまれた土地の人間風景を奇妙なものに思うようになったのです。この土地に住む男女だけ人種がちがうのではないか、ひょいと首をかしげてしまうことさえあります。それがこうじて、いつのほどか私のなかに住むこの人種に、やりきれなさをおぼえるようになりまして。

むろん自分への憎しみは、極端な自己愛と背中合わせの物かもしれません。いつもなまな欲望をむきだしにして暮らしているこの土地の風景は決して私の美意識に快感を与えないくせに、たとえば、そ

の大阪人の臍物からにおいあげてくる独特のユーモアは、それがあまりにも臍物くさいがゆえに、私はのめりこむような魅力を感じてしまいます。おかしなはなしだと思えます。¹⁾

ここまで、私は講義の口調で喋っていますね。教師が自分のしゃべっている内容が普遍妥当性をもっているかのように見せる教科書的な言いまわしです。これは地域性とコンテクスト関係を断ち切って、日本中同じ価値の方向性にする日本の「近代化」の過程と密接な関係があるわけです。司馬さんは、談話では関西弁を使い、書くときには、関西弁を離れた文章語を使ったわけです。このことは想像以上に意味のあることだと思えます。司馬さんにならって私もこれから関西弁で話すことにします。

さて、大阪で生まれて、大阪が好きで、でもなんとなく「大阪の人間は変や、おかしい」と大阪人でありながら思っている。司馬さんのもっているアンビヴァレントな部分です。後述することとも関連しますが、司馬さんが大阪に抱いていた「アンビヴァレントな思い」というのは重要です。おうちが薬屋さんやったし、司馬さんは、江戸前期からの町人学者の伝統の上に自分を重ねておられたのではないかと思うことがあります。だから、石浜先生なんかをととても尊敬されていたんですね。で、大阪人の好奇心、現実感覚、バランス感覚みたいなものが司馬さんのスタイルの一部になっているわけです。大阪人というのは、歴史的に、日本人の中でも非常に早くから、近代化された合理的な精神を持っている。大阪以外の人で、「なんでも金か」と軽蔑する人がいますが、非常に早くから貨幣経済が発達して、当然、個人化の程度が甚だしいわけですね。

例えば、今日は久しぶりに大阪で電車にのろうと思つて、つい東日本で並んでいる気分になつて

並んでいたら電車に乗れない。大阪人は並んでい
るかに見せかけて絶対に並んでいない。自分が一
番先に乗ってしまう。個人主義が徹底しているわ
けですね。それを「欲望むきだし」と司馬さんは
いうわけです。本音で生きている。「そんなんはい
やや、恥ずかしい」と思うのだけれど、同時に「そ
やからこそ」面白い。大阪の人間が二人よると漫
才やということとはほんまにあるわけですね。余談
ですが、うちの子供なんかも東日本にいて困っ
てるわけです。「せっかくボケたのに、誰もつっこ
んでくれない！」あれはとてつらいらしいです。

さて、大阪の合理性を受けいれながらも、欲望
むきだしという態度には美的な嫌悪を感じる司馬
さんの感性というのは、権力に対するものでもあ
ります。商売というのは、基本的に自由競争です
からね、大阪の個人主義と相容れない「官」の思
想というのはあまりうけません。官尊民卑の逆で
すね。司馬さんは、なんども繰り返して「自分は
反権力だ」ということを言います。それをポーズ
だという人がいますが、そういう人にあんまり関
西の人はいないように思います。「大阪人で反権力
でないやつなんかおらへん」とまあ、そこまでい
うと誇張になるけれど、まあ、雰囲気というか、皮
膚感覚としてそんな感じがある。でも、同時に、司
馬さんは「気遣いの人」なんですね。その気遣い
故に批判されることも多い。「反権力であるとい
いながら権力に対しておよび腰である」とか、「卑怯
だ」「臆病だ」とか言われることもある。

気遣いの人

その気遣いということについて塩野七生さんが
伝えるエピソードがあります。

私はそのころ既にイタリアに行っていたんです
が、司馬先生のところに、二作目の推薦文を書いて

くれと頼みに行ったんですね。そうしたら、先生は
お断りになった。断った理由を塩野七生に告げよと
言われたそうですが、その理由は次のようなもので
した。「僕が推薦文を書くと彼女の作品が色分けさ
れるかもしれない。それは彼女にとってよくないと
思うから、僕は書かないほうがいい。」私は断られた
のですが、全然不快でもなかったですね。²⁾

司馬さんは気遣いの人です。いろいろ細かいと
こまで気を使う。でも、通じないこともあるんで
す。

例えば、司馬さんがある新聞社のモンゴルがら
みのプロジェクトの顧問になったことがありまし
た。そのことは正直、私も意外でした。そんな計
画は司馬さんの美意識とは対極のものではないか
と思いました。そう思った人は少なくなかったと
思います。プロジェクトに批判的な態度をとって
いたある人に司馬さんは長い手紙を出した。受け
取った人にはその気配りが、腰がひけてるとい
う風に映ったんですね。多分、表現形式があわなかつ
たということもあると思います。その人も関西人
ではなかったですね。

気遣いの人ですから、小説の中でも悪人が書け
ないという批判もある。歴史物で、悪逆非道な人
物がいても、その人の子孫はいまも生きてるわけ
ですよ。そのあたりのことにも配慮して、悪逆
非道の行いの記述があっても、どっかでフォロー
する。全体として、バランスをとるようなことも
するわけです。それはおかしいという人もいるわ
けです。そんな必要はないと。司馬さんは歴史を
鳥瞰したいと思っているのだから、個人のこまご
まとした事情に対する斟酌など必要ない気がする
のですが、全体を鳥瞰しても、また、歴史の中の
個人、一人一人の喜びや痛みも考えたいという一
種の自己撞着みたいなものがあるわけです。だか
ら、その態度がときとしては謙遜に、ときとして

不遜にも見えるのではないかと思います。例えば、宗教に対して、すごく造詣深く、宗教人たりたいと思っているんじゃないかとさえ思われるのに、一方でまた人間の欲望に対して忠実であろうとするところもある。司馬さんの中には、矛盾する要素が混在しているのです。大阪人として、近代的な人間として、前近代的なものに対して一種の侮蔑があるんだけど、同時に近代化していないものに対して、なにか羨望のようなものがある。そのことが以下にお話するモンゴルとの関係と重要な関連をもつと思います。

大阪外語と「憂鬱な乗り物」

今日、司馬さんのお話をするのは、司馬さんが大阪外国語大学の先輩であるということも当然あるんですが、日本の近代文学者がモンゴルをどうとらえてきたのかという私の研究上の問題関心でもあるのです。

日本で、「蒙古」ということばが今のような意味で日常的に使われるようになったのは、明治になってからのことです。勿論、より古い時代に蒙古が出てきますが、「蒙古来」と民族としてのモンゴルは繋がっていなかったのです。「近代化」過程の中でヨーロッパの言語として用いられる<モンゴル>の訳語としての「蒙古」が新たに登場したわけです。その明治にはじまる「蒙古」をめぐる様々な言説が、現在の我々のモンゴル観にも大きな影響を与えています。

そのことに関連して、私はいままで山路愛山、与謝野晶子、尾崎士郎、村上春樹といった人々のモンゴルに関する言説について書いてきました。そこには共通したひとつの通底音があるといえると思います。それは「オリエンタリズム」とよばれるものの問題であると言ってよいでしょう。

司馬さんのモンゴルをめぐる言説はそうしたも

のとどのような関係があるのでしょうか。それはいずれもう少し長い論文として提示しようと思っていますが、今日はそれをさぐるいくつかのヒントについてお話してみたいと思います。

『司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録』の中にこんな個所があります。ちょっと長いですが引用します。

—— 司馬さんが書いたエッセーの中で、受験に失敗して友達と道歩いて、友達から「おまえは何になるんだ?」と聞かれて、「馬賊になつたねん」と言ったと書かれています。本当の話ですか?

司馬: とりとめもない少年だったことは確かですね。

—— 馬賊と言ったというのは、モンゴル語と関係があるんでしょうか?

司馬: モンゴル語というのは、それは僕が選択した唯一の進路です。しかし、それにしても大学には卒業までいられなかったからね。兵隊に取られましたから、習ったことはみんな忘れちゃったね。

—— 司馬さんにとってモンゴル語を選んだことが、大きかったですか?

司馬: 生涯の経歴になりましたね。

日本人がモンゴル語をやるということは、フランス人が英語やドイツ語をやるということなんです。方言を習うようなものなんです。重要な単語は、生活用語以外は共通しているでしょう。そして、少し語法が違う。感情の表現が違う。おもしろいだろうと思うんだ。ところが、日本の少年は全然、言語の構造の違う英語をやったり、中国語を習ったりしています。これはもう、毎日逆立ちしているようなものなんです。それなら、同じ構造のモンゴル語をやったほうがいい。

大阪外語の一期生の人で石浜純太郎さんという偉い東洋学者がいて、僕がこう言ったことがあ

ります。

「高校の選択科目でモンゴル語をやるべきですな
そしたら石浜さん、

「中学からのほうがええのと違うか」

石浜さんは東京大学を卒業してから大阪外語に行っただけです。大学者ですが、ちょっと変わってるでしょう。

ただ、韓国語を除いて、日本と同じ文法の国が、いわば文明語として認められている国が今のところないからな。育ち盛りの少年にそれを押しつけることはできない。やっぱり文明語でない、心が奮い立たないでしょうから。

日本の孤独はそういうことにもありますね。

文明の第一線にいるというヨーロッパ人やアメリカ人には、日本人の孤独な苦しみはわからないでしょうね。³⁾

これは司馬さんが文化勲章を貰った直後のインタビューです。

モンゴル語科に入ってしまったのが、生涯の経歴になるというのは、皆さんも、そして私も同様のことであろうと思います。生涯の履歴というのは、「消したくても消せない生涯の汚点」か「誇り」かみたいなことですが、選んでしまったことがとても大きなことだったと司馬さんは言うわけですね。モンゴル語の学習が、「方言を習うようなものです」といわれると「そらちゃうでしょ」とかいいたいくなりますが、まあ、司馬さんにとってはそうやったんでしょうね。こういう言説だけを読むとですね、大阪外語について非常に肯定的であったという風に思えるでしょう。でも、司馬さんは、ある時期まで自分は外大にいたことをなるべく言わんようにしていたというようなことも言ってるんですね。エッセーの中で、あそこで勉強を続けるくらいなら「兵隊にいったほうがまだ」という感じやったということを何度も書いておられる

し、「あー、もうあそこで勉強せんでもええわ」と思っただけ。実は、私は自分が外大生であった頃、司馬さんから直接、「外大は嫌いやった」というのを聞いたことがあります。勿論、「後から後悔しないように漢文は個人教授してもらってでもやっつけ」といったアドバイスをいただいたときに冗談めかしたお話でしたが、司馬さんが語学の勉強が嫌いやったというのはよく分かります。数学ができへんかったばかりに外国語学部に入ったというようなパターン人間が味わう悲劇です。私自身、長い間、語学の教師してきたわけですが、それでも、なんでこんなところに入ってしまったんやろって思いました。

外大は今ではかなり変わったと思いますが、私たちの頃は、まあ、失礼な言い方ですが、言語フリークみたいな人がいっぱいいたわけですね。言葉が好きで好きでしようがないという人たちですね。中には言葉というより、音そのものが好きな人もいます。言葉じゃなく、音ですよ。意味なんかなくてもいいってくらいのもんです。「あれはなんとか方言や」とか、「あの吸音を出すのは・・・」とかいってテープレコーダーをかかえて、あっち、こっちとネイティブスピーカーを追っかけてまわす。「ロシア語の辞書を全部暗記した。これで3回目や」とかいうたりしてね。そういう変な人たちの中で、毎日、重たい辞書引きながら「あ、俺は言語が好きなんとちごて、言語を使う人間が好きやっただけなんや…語学なんか嫌いや」と思いましたね。司馬さんは、『符牒』の勉強では青春の渇きはみだされません。」と表現しています。

さて、外語の問題については、司馬さんが本の中なかではあんまり触れていないもうひとつ大事なことがあります。つまり、外大が「烈士の碑」と繋がっているという事実です。同窓会報の表紙を飾った司馬さんの学生時代の写真にも登場するあの碑は昭和13年頃にできたんだと思います。昭和

13年という、1938年ですか、とするとノモンハンの1年前ですね。その頃、確か徳王が外語を訪れています。外大が上本町から箕面に移転した後も外大とともにある。もちろん、いまでは碑の意味付けも変わっていると思いますし、いまの学生さんのなかにはその存在すら知らない人もいますけど、みなさんとも無縁ではない。我々みんなの過去の一部です。

実際のところ司馬さんは、昭和のある時代の「烈士の碑」に代表されるような時代の雰囲気（烈士と呼ばれる方々そのものではなくて）に、ある程度、批判的であったようです。上本町の外大は司馬さんも「卒業後、ずいぶんたってタクシーで外大にいったら、校門が分からんと通りすぎてしまった」というくらいのみすばらしい学校だったんですが、そこに池とはいえないような池があったんですね。真冬にその池につけられるなんてことがあったらしい。学生がやるのはしょうがない。でも先生たちがそれを止めようとしなない。それは非常に情けなくもあり嫌になったというような話をどっかで聞いたことがあります。司馬さんは、愛情あふれる精松源一先生の追悼文を毎日新聞にお書きになり、最後まで恩師としての礼を尽くしておられましたが、精松先生もそうした雰囲気を容認しておられたことには批判的でした。

色川：当時の蒙古語科卒業というのは大陸浪人と似た感性があったのではないか。私の友人にも上海の同文書院とか、満州建国大学に行ったのがいますが、みんな「支那には五族の民が住む」なんて大きな声で歌いながら、日章旗を万里の長城に掲げ「満蒙に雄飛する」のが彼らの夢でした。日本民族は資源のない小さい島にいるのだから大陸に膨張していくしかない、その先端に立とうというのが彼らの意気込みでしたね。

司馬さんがそういうものに同調していたかどうか

は疑問ですが、外語の叢古語学科がそういった雰囲気の中にあったのは、たしかだろうとおもいます。⁴⁾

慎重な言いまわしですが、この引用のコンテキストとしては、少なくとも色川氏と対談している佐高氏は、司馬さんが雰囲気を引きずられていたというニュアンスを出そうとしています。しかし、私も、同文書院や満州建国大学などのご出身の所謂満蒙で特殊な任務につかれた方々の中で「自分のやってきたことは正しかった」と自信をもって言われる方々にお会いすることがあります。そうした方々の置かれた状況も、生き方も、お一人お一人違うわけで、十把ひとからげに論評できるわけではないですが、そうした方々の言説と司馬さんのものいいは少し違っていた。その点についてはもう少し厳密に検討しなければならないと思います。

もうひとつだけ付け加えておきたいのは、先ほど言及した精松先生、——先生は外語の蒙古語一期生なんですが——満鉄に入りたくて入りたくてしょうがなかったんだそうです。当時の満鉄は超エリートコースですね。でも欠員がなくては入れない。そこで先生は郷里の鹿兒島へ帰って、巫女さんのような人に欠員が出るように呪詛してもらったというのです。結局、呪いの効果はなかったらしいのですがね。これは精松先生から直接聞いた話です。モンゴル人とモンゴル語が好きで好きでたまらなかつた精松先生がどの程度の帝国主義者であったのか私には分かりません。満鉄事件が示すように、満鉄には沢山の社会主義者がいたわけですよ。西北研究所にも。当時の大陸への関心も決して一元的なものではなかつたはず。そして、社会主義であれ、キリスト教宣教師であれ、モンゴルに対してオリエンタリズムをいだいていなかつたわけではありません。

司馬さんが「馬賊になりたかった」というとき、だから帝国主義、侵略主義、あるいは冒険主義者と短絡はできないし、同時に侵略主義者でなかったから、なんの問題もないと言えるわけでもありません。司馬さんだけでなく、「蒙古放浪の歌」をくちずさむ人が、みんな同じメンタリティーをもっていると考えるのはあまりにもナイーブなことだと思います。

さて、外語から開放されて司馬さんは戦争にいく。外語の、あるいは時代の雰囲気になじめないというのが、一体なにかということは学生の頃の司馬さんには、それほどはっきりとした形では認識できていなかったと思われますが、それが形をなして、大きな転換をもたらすのが、有名な戦車部隊での経験です。

この三式戦車を特徴づけるその大きな砲塔をヤスリでけずってみようと思ったのである。なぜそんな気をおこしたのか、正確には思いだせないが、なにかいかがわしさを感じたのかもしれない。あるいは初年兵のとき、カマかせにヤスリをおさえこんで前後運動をくりかえしても、ヤスリはむなしくカラカラとすべるだけというあのすばらしい硬質感をもう一度味わいたかったのかもしれない。私は砲塔のふちにヤスリをあててうごかしてみた。ところが砲塔の鋼はざらりとヤスリの目を受けとめたのである。かすかながらギシギシと手応えがして、おどろいて手をとめてその部分をなかめてみると、白銀色の削り傷ができていた。こんなばかな話はなかった。腐っても戦車ではないか。

このことは、私個人の太平洋戦史にとって、もっとも重要な事実のひとつである。

その装甲の厚さをチハ車の砲塔と比較すると、チハ車の砲塔の前面が二五ミリにすぎないのに対し、五〇ミリというたっぷりした厚さであった。その厚さは世界の水準にはおよばないとはいえ、日本の戦

車としては思いきった厚さである。それが装甲用の特殊鋼でもなんでもなく、ただの鉄にすぎなかったのである。ただの鉄という戦車は、戦車の歴史で例がなく、昭和の陸軍首脳いかに戦争指導能力に欠けていたかを証拠だてている。⁵⁾

数学ができへん人間がどうやって弾道の計算をするのかと不思議になりますが、まさに日本の軍隊がいかにひどい状況であったかがわかりますね。司馬さんは、数学はできへんけど、大阪の薬屋の息子ですから、科学的なものを見ようとする人でした。それが証拠に新聞記者時代には科学関係の記事を書いていて、理論物理の説明には自信があるとまでいうてはりますからね。それで、戦車を削ってみて、なんやねんこれはと思ったわけですね。でもみんな知ってるのに、「こんなもんで戦争に勝てるかい」という風にいう人間がいないことに驚くわけです。日本人っていったいどないなってるんねん。なんでそんなもんができたんかを鳥瞰してみたいと司馬さんは思うわけです。「憂鬱な乗り物」の中での経験がその後を決定づけたのは本当のことだろうと思います。

初期作品の中のモンゴル

司馬さんは、戦争が終わって日本にもどって新聞記者になる。いわゆる学芸部というような仕事をして、そのうちに小説を書く。司馬遼太郎の名前でのデビュー作が「ペルシャの幻術師」ですね。実は今日みなさんにお見せしようと、外大でこの作品をさがしてもらったんですけど、図書館にないですね。この頃、外大は、なにかといえば、司馬遼太郎が・・・とか言いながらねえ…。でも、無理もないところもあるんです。司馬さんはある時期からこの作品を意識的に読者の目から隠しているようなんですね。いまのところ全集の中には入って

ないんじゃないですか。(2000年になって全集の最終巻に収録されたようです。)司馬ファンで作品を読んだことのある人の中でこの作品を高く評価する人は少ないと思います。自分でも納得できないところがあったんでしょうね。

「ペルシャの幻術師」はモンゴル軍のペルシャ攻略を舞台にする小説で、チンギスハーンの曾孫とペルシャの幻術師の対決がクライマックスです。つまり、最初の受賞作はモンゴルものだとも言えるわけです。この作品で講談倶楽部賞を取って、小説家としての自覚をもつ。その後に、『近代説話』での活動が続くわけです。寺内、伊藤、胡桃沢、後から田辺さんも、錚々たる直木賞作家メンバーを擁することになる同人誌『近代説話』の記念すべき第1回作品が「戈壁の匈奴」です。

この作品はちゃんと全集の第2巻に収録されているし、普通の文庫の司馬作品集にはないんですが、日本ペンクラブ編の短編小説集の中で同じくわが校の先輩である陳さんが編集した光文社文庫『黄土の群星』には入っています。「ペルシャの幻術師」以上に、司馬さんが「戈壁の匈奴」に愛着をもっていた事がわかります。

しかし、私はこの作品が好きではありません。私は真面目な司馬ファンですから、少なくとも自分にとって面白くない作品も結構あるとちゃんと言います。司馬作品の中、「戈壁の匈奴」はワーストのうちのひとつに数えてもいいんじゃないかと思うんです。講談倶楽部賞の受賞のことばでも述べているように、この頃、司馬さんは、新しい説話を書こうとしていたのです。『近代説話』のグループが目指していたことは何かということそれは、「面白い」ことです。面白い小説、文句なしに面白い小説を出すんや。だから同人はお互いに批評しあわない。自分が書きたいものを書くというわけです。

「小説というものは自分で考えだして書くべきもので、「純文学」とか「大衆文学」とかいうふうに概念で分けて書くものではありません。わたしはそうした概念で小説を書こうとしたことは一度もありません。」⁶⁾

同じようなことを司馬さんは何度も言っています。基本的にエンターテインメントを書いているということになるのだけれど、それをどう呼んでくれてもよいということでしょう。事実、「殉死」や「故郷忘じがたく候」などを純文学と呼ぶ人がいるわけですね。でも同じ人が『梟の城』をそう呼ぶかというと呼ばない。でも司馬作品として実は同じものなのだという事です。ここで、「面白かったらええねん」と歴史叙述の問題がでてきます。新撰組の描き方についての色川大吉氏の批判に、司馬さんは、「色川さんの言うのは、歴史でしょう。それと歴史小説は違う。歴史小説というのは、読んでくれる方に楽しみの娯楽を与えるものであって、読んだら絶望してしまうようなのはだめだ」と答えたと、色川氏は証言しています。⁷⁾

読んだら絶望してしまうようなことではだめだ。小説を読んで「よし、頑張って生きていこう」と思えるものを書きたいと司馬さんは思っていたわけですね。それに尽きるといってもいいでしょう。

司馬文学のスタートの頃、近代における説話の再生のキーワードはロマンとエロチシズムです。「戈壁の匈奴」は、簡単に言ってしまうと、チンギスハーンの征西の原因をチンギスハーンの美人に対する飽くなきあこがれに求めるという話です。まあ、ちょっとしたオチのようなものも用意されているのですが、私自身の最初の読後感はあまりよくなかったし、読みかえしてみても感心しない。井上靖の『蒼き狼』も近代主義的にチンギスハーンの行動を合理化しようとした試みだといえるでしょうし、司馬さんの「戈壁の匈奴」もチンギス

ハーンのリビドーによる近代主義的な合理的解釈だといっていいでしょう。いずれも、チンギスハーンの当時のモンゴルの現実とはかけ離れたものです。読者はモンゴル人ではなく、現代の日本人なのでからそれも当然のことでしょう。

「ペルシャの幻術師」も「戈壁の匈奴」も、登場するモンゴル人は男で、主要な女性の登場人物はペルシャ人や西夏人です。

「ははは、どうせ蒙古の女だろう。蒙古は、馬はよくても、女はわるい。蒙古の女は犬より劣る。」⁸⁾

「蒙古」にはくもんごる>、「犬」にはここでのげい>とルビがふってあります。

まあ、コンテクストがないとわからへんと思うんですが、戦闘的フェミニズムの文芸批評ではどない書かれるやろと心配になるくらいです。

司馬さんの女性の描き方については、「ワンパターンの下手だ」とする説と、「上手い、健康的なエロチシズムに溢れている」と意見がふたつに分かれるわけですが、その議論は置くとして、興味深いのは、司馬さんがモンゴルには美人がいないと断言することです。不思議なほどこれを司馬さんは繰り返すのです。

司馬 「高麗女に気をつけろ」というのは、美人が多かったからじゃないかな。

陳 はじめはそうなんです。美人に迷うから。

司馬 いまでもモンゴル人は、自分たちには美人はいない、中国にはいると言うね。

金 ベトナムにはいるけれども、モンゴルにはいないみたいだね。⁹⁾

瑣末なことのようですが、これは司馬さんのモンゴル観の中で重要な点です。美人の定義自体が大いに問題ですが、私の基準では、モンゴル人の美人を沢山知っています。モンゴル人の間でも、ど

ここの県がとか、ダリガンガに美人が多いとかなんとかそういう話は出ますよね。実は、司馬さんには、モンゴル人の顔というのが単一のものだという思いこみがあるのです。これは、19世紀から20世紀にかけての西欧のオリエンタリズムによるバイアスのかかった書物からの知識が固定観念となった典型的な例だろうと思います。

以前、村上春樹のモンゴル人像についても言ったことなのですが、モンゴル人の容貌に関する固定観念は西欧において作りあげられた幻想なのです。そして実はそのモンゴル人はモンゴルのモンゴル人ではないのです。ですから、モンゴル人にはいろんな顔の人がいるということを経験しても、自分が典型と思っているモンゴル人以外はモンゴル人的な顔ではないとしてモンゴル人から排除してしまうような一種のオリエンタリズムによるフィルターができあがってしまう。司馬さんほどの教養のある人なら、モンゴルという民族の成り立ちの過程から考えてモンゴル人にはいろいろな相貌が有り得るのだということは分かるはずなのにです。

もっとも、司馬さん、「ペルシャの幻術師」「戈壁の匈奴」の頃は、実際のモンゴル人を十分に見たことがなかったのです。外語の先生くらいしかモンゴル人に会ったことがなかったでしょう。でもモンゴルに行った後も、司馬さんの中に「モンゴル美人不在論」は根強い。モンゴル研究会が司馬さんを囲む会をやったときも、集まった学生の顔を眺め、I氏をさして、「君はモンゴル人の顔や」と言われました。モンゴル顔に関する思いこみは変わらなかったようです。

非モンゴル系の美女を求めてやまないのがモンゴル人という図式は、「中国数千年の歴史時間の中で、長城に肝脳を地まみれにして加えつづけたピストン運動というものに強い悲哀を感じて」という司馬さんの表現と呼応しているのです。

小説として、「戈壁の匈奴」は一種のクリシェです。司馬さんは、司馬名義の最初の作品を日本人もまったく出てこないタイプの小説が実験的な試みであったというような自己評価をされていますが、それはエンターテイメントの世界でも小栗虫太郎の例に見られるようにさほど珍しくなかったのではという気がするのです。このことに限らず、司馬さんが自作について語るときにはかなり韜晦的な面があることにも注意しなくてはなりません。

お坊さんの雑誌の中での習作時代と、デビューの時、『近代説話』の初期には、モンゴルをひとつの道具として使って小説を書くということを意識的に行っていたわけですが、いずれにしても、この頃の作品は、「塞外の民族の集団としての運命」とかいうレベルのものではなく単なる道具立てのひとつだったように思えます。

ですから、作品が忍者ものにシフトしていくと司馬さんはモンゴルから離れていきます。そして文句なく面白い小説『梟の城』で直木賞をとり、これを契機に作家として一本だちしていくことになります。そして、忍者もの、戦国ものから幕末もの、そして、明治ものへという風にシフトしていく。その時代は、高度成長の時代ですね。高度成長期を担うサラリーマンに元気を与える小説を書くようにしていたわけですね。「憂鬱な乗り物」にのっていたノーを言うべき昭和の時代があって、新たなエートスとタイモスをもって時代を切り開く日本人へエールを送る。そして、その高度成長がある地点までやってきたとき、それは作家司馬遼太郎の評価が名実ともに定まった頃であるわけですが、再び司馬さんはモンゴルを書くことになります。

『モンゴル紀行』と『草原の記』

1974年の『モンゴル紀行』は司馬さんのモンゴ

ルに関する書物のなかで最も重要なものです。

当時の私の夢想は、漢民族からこういう奇態な文字をかぶせられた民族を、ちょうどいまの子供が宇宙人をおもうような感じでさまざまに想像することだった。文字が奇態なだけに、宇宙人への想像よりも、私には刺激的だったように思える。たとえば狄などという文字の形のよさといい、音の金属的な快さはどうであろう。狄は漠然と北方の非漢民族をさす言葉だが、文字に「犬のようなやつら」という気分がある。犬のように素早く、犬のように群れをなし、犬のように剽悍で、犬のように中国文明に無知であるというところに、草原を駆ける狄の集団の、たとえば蒼穹を虹のつらぬくようなたかだかとした爽快さが感じられるではないか。¹⁰⁾

司馬さんは金属的な音がお好きなようで、人の声についても金属的と表現することがあって心地よいという評価なんですね。初期の作品で漢字にモンゴル語のルビがあったように、漢文という世界を通しての塞外の民への関心だったんですが、それは、「もし彼ら民族の心というものが書ければ、いつ死んでもいい」と発言させるまでのものだったわけです。単なる道具立てではなく民族の心を書くという覚悟をそれとなく示していると言ってもよいでしょう。

さきにふれた夢想少年のころ、自分のこのえたいの知れぬ夢想の群れを何によって総合していいかわからず、いっそモンゴル言葉を勉強してモンゴルに取り憑かれてみようと思ったときに、ひどく荷が軽くなったような実感がある。

そのときも、モンゴルをすこしでも知っていたわけではない。むしろ知識がないからこそ、自分の夢想を総合する代用観念になったわけだし、その観念で昂奮することもできたのである。

たとえば、インドならまずかった。なまじい、インド人なら神戸あたりで貿易商などをしていてその姿を日本で見るができるし、それに仏教の故郷という知識などもあって、想像が小さくなってしまふ。そこへゆくと、モンゴルは蒼い天空の下を馬で駆けまわっているという大光景のほかは、すべてとりとめもない。だからこそ地名や民族名でありながら、少年の観念の代用になりうるのである。

もっともモンゴル語を習いはじめてから、この言葉を日常つかっている人数が、世界で、ちょうど大阪市の人口ぐらいしかないということを知ったとき、覚悟していたとはいえ、ちょっと気持ちの悴れる思いがした。いま、友人から、モンゴルという国はあるのか、といわれてべつだん笑う気がしなかったのは、私にとっても似たようなもので、モンゴルは多分に夢想の中の国だからである。¹¹⁾

「いやや、いやや」というてたモンゴルの勉強がやっぱり好きやったということが分かりますね。最初に言いましたように、司馬さんは矛盾の人というか、常にアンビヴァレントな思いとバランスをとりながら生きていた人です。結局は誰でもそうなんでしょうけど、多くの場合、一貫性みたいな外皮を被ってるんでしょう。司馬さんの魅力はそのアンビヴァレントなものへの共感にあると言えなくもない。ですから、作品の中の登場人物が、司馬さんとは反対に、シンプルな生き方を選ぶと、まことに清しい感じがするわけです。

『街道をゆく』で「モンゴルへ行きませんか」という話になる。その時、「モンゴルは夢想の中の国だった」と司馬さんはいうのです。司馬さんは、モンゴルに出かけるまでにもの凄く量のモンゴルに関する本を読んでいたと言ってもいいでしょう。そして、司馬さんは自分の頭の中にあるモンゴルに会いに行ったのです。このことはとても大事なこと

だと思ふのです。実際のモンゴルを知っている人が作品に違和感を覚えるのはそのためです。モンゴルを知らない人にはその違和感がない。つまり、司馬さんのモンゴルがあるがままのモンゴルだと思ってしまうかも知れません。でも、司馬さんが度々語るロマンとしてのモンゴル、そのモンゴルは司馬さんの頭の中にあるモンゴルです。モンゴル紀行で語られるモンゴルは本当の、あるがままのモンゴルではなく、司馬さんの目を通したモンゴルであり、多少の修正があったとしても、頭の中のモンゴルです。ジャーナリストとして、客観的なモンゴルを書いているなんてことを作品の中で司馬さんは一言も言っていない。所謂ルポルタージュ作品ではないんです。

1970年代のモンゴルのことは、いまでは少しわかってきていると思いますが、モンゴル人にとっては大変な時代だったわけです。80年代の初めでも、私のような人間にだって尾行がつくようなことがあった。直接経験した社会主義の時代の悪口はいくらでも言えたはずですが。だけれど、お読みになってわかるように正面きったモンゴルへの悪口はでてこない。「気遣いの人」であるためでもあります。同時に現実と違う、頭の中のモンゴルへの思いがあるのです。

その頭の中のモンゴルは、その『モンゴル紀行』の後日談とも言うべき『草原の記』でも繰り返し登場します。

(なにが、モンゴルのなだらう)

街を歩きながら、ずいぶん考えた。街にあるのではなく、草原にあるのではないか。あるいは草原にあるのではなく、虚空にあるのではないか、いっそ虚空そのものではないか、などと考えていくうちに、またしてもモンゴルへの想念が気体になった。¹²⁾

そんなことを思いだしながら、私はウランバートルの街を歩いている。

ここには、都市がもつ必然の性格としての隈雑さがない。

ちかごろディスコやバーができたときが、ごく最近まで酒場がなかった。まして売春宿もない。

なにやらこのあたり、オゴタイのカラコルムと同様、危うくまちぐるみ気体になりそうな気もし、またモンゴル人は大なり小なり、オゴタイなのではないか、とおもったりするのである。¹³⁾

『草原の記』のなかで山崎正和氏が絶賛した「元の北帰」についてのあたりの一節ですが、少なくとも『草原の記』の頃、モンゴルには売春宿はあったし、『モンゴル紀行』の頃でも、外国人の目につくところにも、主にロシア人相手の言わば売春婦的な人たちがいて、新聞記者としての鋭い観察力をもってすればウランバートルホテルあたりでもそれとなく分かったはずですが、でも司馬さんは、そんなモンゴル人ではなく、奇跡のように欲望すくなく生きているモンゴル人を見たいと思った。だからウランバートルの町にオゴタイのようなモンゴル人を見た。勿論、オゴタイのように寡欲に生きているモンゴル人も沢山いるだろうことを私も否定しないし、そうあってほしいと心から思います。でも、『草原の記』が出版されてまもない1994年、ウランバートルに滞在して、私にはそういうモンゴル人の姿が見えなかった。それで、司馬さんに、「私には残念ながら先生が書かれたようなモンゴル人の姿をウランバートルの町で見ることができません。」という手紙を書きました。でも、考えてみれば、そんなことは当然で、司馬さんにはそんなことは関係あらへんわけです。括弧つきの民主化の後、とくに感じるんですが、もう救いようなない思いにかられるモンゴルの状況があるんだけれど、それをことあげしたところで「読んだ

ら絶望してしまうようなのはだめ」なんです。

ただ、司馬さんは作品の中で、頭の中のモンゴルと現実のモンゴルのバランスをとることを忘れてませんでした。頭の中のモンゴルを現実に取り戻す存在として、ツェベックマさんを置いた。現実への掛け橋だったからこそ、司馬さんはツェベックマさんについて書くときにとても気を遣っています。それは、司馬さんが本当のモンゴルをしっかりと見ているからです。ちょっとでも書きすぎると、彼女やその周囲に直接的な影響が及ぶ。そのことを司馬さんは熟知していたし、自分の文学のためなら、外国人の人生に多少の波風がたつても問題はないという風には決して考えなかった。ツェベックマさんがチタで生まれ、バルガに行つて、バルガから内モンゴルの中心へ、そしてウランバートルまでのという、その軌跡が示す現代史の重さを考え抜かれていたと思います。

ツェベックマさん自身が以下のように回想しています。

司馬先生はいろいろ私に質問されたが、政治的なことにはほとんど立ち入らなかった。社会主義体制下での政治的発言の難しさをよくご存知で、私の立場を配慮してくださったのだろう。ただ一度だけ、チンギス汗について尋ねられた。

「チンギス汗は今、どうなっていますか？ ツェベックマさんはどうお考えですか？」

「チンギス汗の問題は、モンゴルでは厄介な問題です。今は残念ながら、何も申し上げることができません。ただ、私が自分の考えを持っていない人間とは思わないでください。きっと、お話できるときがくるでしょう。」

私が、こう答えると、先生が、「よく分かりました。もうそれで十分です」と言われたことが、記憶の奥に残っている。¹⁴⁾

では、そこまで現実のモンゴルを冷徹に観察しながら、頭の中のモンゴルを書こうとしたのは何故でしょうか。それは、我々が失ってしまったもの、日本がここまでやってきたことの対極にあるものを描いてみたいということだったと思います。『竜馬がゆく』を書き、『坂の上の雲』を書き、軽蔑しつつも、いとおしくもある欲望まる出しの大阪人に代表される、近代の価値理念で一生懸命に生きる人々にエールを送り続けてきたけれど、日本人は大きなものを失ってしまった。その対極にある、オゴタイのようなモンゴル人の姿を日本人に見せたかったからではないでしょうか。

日本国の国土は、国民が掘って立ってきた地面なのである。その地面を投機の対象として物狂いするなどは、経済であるよりも、倫理の課題であるに違いない。ただ、齒噛みするほど口惜しいのは、「日本国の地面は、精神の上において、公有という感情の上になつたものだ」という倫理書が、書物としてこの間、たれによっても書かれなかったことである。¹⁵⁾

「労働のよろこびもなく、農民の誇りもない」日本人、物狂いしている日本人に土地の所有の概念をもたないモンゴルの「聖なる単純さ」を示したかったのです。その証拠に、晩年のエッセーには、アーリア系の美女を求めて西へ向かう性欲の塊みみたいなモンゴル人にならなくて、富士山に向かって香を焚く「古人の心」をもつモンゴル人が登場するようになります。¹⁶⁾

そうしたモンゴルやモンゴル人の姿は日本人を読者として想定して描かれたものであることは司馬さん自身の認めるところでした。『草原の記』をモンゴル語訳する許可を求めた私の手紙に快諾の返事をいただいたときに、司馬さんは、『草原の記』が果してモンゴル人にとって面白いかどうか、という意味のことを書かれています。そして、折角、

許諾を得たのに訳業を途中でなげだしてしまったツェベックマさんと同じような体験をもつモンゴルの老婦人は、「自分にはちっとも面白くなかったので」と述懐しています。

繰り返しになりますが、夢の中のモンゴルはふっと気体のように虚空に消えてしまう。それを作品の中に閉じ込めることができたのは、司馬さんとツェベックマさんの出会いだったと思うのです。ツェベックマさんの人生は司馬さんに会うことによって変わった。鯉淵さんが言うように、彼女の「希望だけの人生」は「実りある人生」に変わったのです。司馬さんもツェベックマさんに出会うことによって変わりました。そろそろ死を意識しておられたのではないかと思う頃、モンゴルについての締め括りの本の、最も魅力ある主人公にモンゴルの女性を選んだのです。初期の作品では、魅力において犬より劣るとしてモンゴルの英雄に無視させたモンゴルの女性を。

『草原の記』は二つの魂の出会いと交流の物語なのです。

日帝時代や、文革時代、あるいはツェデンバル時代のモンゴルの悲惨をあれこれと聞かされるときより、モンゴルの地で死ぬためにやってきた父の最期をみとった娘が父の留学時代に通った聖橋をわたる、その思いに、人はより多くのことを感じるのではないのでしょうか。

私はモンゴルにいて、司馬さんの書く理想のモンゴル人がいないと不平を鳴らすような状況下で、ナツァクドルジン・アーナンダーシュリに会ったわけです。ものごころつかぬうちにモンゴルからレニングラードに連れ去られ、時としてはモンゴル人、時としてはロシア人として扱われて、ナショナルリズムの嵐のバルト沿岸から終の棲家と決めた父の国に戻り、「変死」という扱いをうけた。その彼女の苛烈な人生がツェベックマさんたちの人生と重なるんですね。

最初のモンゴル訪問でのツェベックマさんとの別れの場面。みどり夫人に宝石がプレゼントされますよね、夫妻はそして機上の人となる。「ウランバートルの街は、空気が乾いているため遠霞むということはない。…ただ小さくなってゆくのみである。」と司馬さんはさりげなく書くわけです。『草原の記』の中でも男らしい嗚咽を漏らすのは、鯉淵教授ですよね。司馬さんは自分自身の感情表現を書かない。司馬さんの美意識でしょう。でも遠のくウランバートルの町は涙で霞んでいたのかも知れません。

今回、『草原の記』を語劇にするということで、ここに集まっている学生の皆さんも頑張っておられると聞いています。嬉しいことです。遠慮なく、思いきりやってください。原作に縛られることなく、司馬さんのモンゴルへの思いを伝えてほしいと思います。ただ、内モンゴルを取り巻く情勢は、残念ながら、我々が普通に想像する以上に厳しいものです。どうか司馬さんの気遣い、ツェベックマさんやその周囲の方々への思いやりを大事にしていきたいとお願いしておきます。

司馬さんからのメッセージ

『モンゴル紀行』『ロシアについて』『草原の記』といった作品においても、司馬さんがオリエンタリズムから全く自由であったとは言えないと思います。でも処女作から最後の作品まで、司馬さんは非常に真摯にモンゴルと格闘されたと思います。司馬さんが語られるときモンゴルが語られ、モンゴルが語られるとき司馬さんが語られるという状況はこれからも続くでしょう。

我々は後輩として、なにかしら恣意的であったり、感情的なレベルではなくて、冷静かつ真摯に先輩の残したものに向き合っていくことが必要なんじゃないかと思います。

『モンゴル紀行』が出版されたとき、外大の研究室に「学生にも」と本が送られてきました。ジャンケンで勝って私が本を貰い、司馬さんにお礼状を出したんですね。正確になにを書いたのか覚えていません。なんか汚い葉書か便箋に書いたんやろと思います。あれが司馬さんのお宅のどっから出てきたら、恥ずかしいですね。まあ、いまの自分たちにとって、モンゴルはロマンの対象たりえないのだというようなことを書いたのだと思います。その手紙に返事をいただきました。「いまは、そういうロマンティックな感じ方としてのモンゴルでなくなっていることもよくわかります。」と司馬さんは書いています。「でも・・・」と司馬さんは思っていたのでしょう。

いまでも手紙は大切にあってあります。「民主化」など夢だにできない頃、金になるわけでも、研究職につけるわけでもない、モンゴル研究なんてやめようとなんども思うことがありました。そのたびにこの手紙に励まされたような気がします。これはただ私にだけではなく、大阪外国語大学でモンゴルを学ぶ人みんなにあてられたものだと思うので、その一部をご紹介します、今日のお話を終えることにします。

「中国人にモンゴル学者がいますか？いないじゃありませんか。中国人の青年たちがモンゴル語を学問として勉強しますか？だれもそういう学生はいません。日本はちがいます。アジアでは日本だけです。」

と、あの本の中のツベックマさんがいいました。大阪外国語大学のモンゴル語科が、世界のための学問の場であるという風に、貴兄たちが、そのようにして行って下さい。私どものころは戦争ばかりでじつにつまらぬ時代でした。私どものころも優秀な人たちがいましたが、戦争と戦後の混乱のためにみな道中で変なくあいになりました。その悔いを後進

のひとびとの努力で癒してもらいたく、こんな返事
を書きました。

諸兄によろしく。

十二月 何日だったかな。 夜、

司馬遼太郎

注

講演の際はモンゴルへの言及のある個所を集めた資料を用いましたが、ここでは直接引用した個所のみ、可能な限り文庫版で示すにとどめました。作品によって表記の違うモンゴルの名前は司馬さんの発音に近い表記を採りました。

尚、日本人のモンゴルに対してのオリエンタリズムについては、拙論「村上春樹とモンゴル もう一つのオリエンタリズム」『モンゴル研究』No17、1998を参照していただければ幸いです。

- 1) 文藝春秋 編『司馬遼太郎の世界』 文春文庫 1999 499頁
- 2) 『司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録 VI 完結編』 朝日新聞社 1999 155頁
- 3) 『司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録』朝日新聞社 1996 298-299頁
- 4) 佐高 信 『司馬遼太郎と藤沢周平』光文社 1999

201頁

- 5) 司馬遼太郎『歴史と視点 私の雑記帳』新潮文庫 1974 59頁
- 6) 文藝春秋 編『司馬遼太郎の世界』 文春文庫 1999 510頁
- 7) 佐高 信 『司馬遼太郎と藤沢周平』光文社 194頁
- 8) 陳舜臣選『黄土の群星』光文社文庫 1999 292頁
- 9) 司馬遼太郎・陳舜臣・金達寿 『歴史の交差点にて』講談社文庫 1991 40頁
- 10) 司馬遼太郎 『モンゴル紀行 街道をゆく5』朝日文芸文庫 1978 10頁
- 11) 司馬遼太郎 『モンゴル紀行 街道をゆく5』朝日文芸文庫 1978 13頁
- 12) 司馬遼太郎『草原の記』新潮文庫 1992 43頁
- 13) 司馬遼太郎『草原の記』新潮文庫 1992 84頁
- 14) B・ツェベクマ 鯉淵信一構成・翻訳『星の草原に帰らん』NHK出版 1999 211-212頁
- 15) 司馬遼太郎『風塵抄 二』中公文庫 2000 282頁
- 16) 司馬遼太郎『風塵抄 二』中公文庫 2000 194頁

付記：この稿の最終校正を終える頃、帯に「幻のデビュー作」と大書された『ペルシャの幻術師』が文春文庫として発売された。

(しばやま ゆたか)